



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

犬と飼い主は目が似ていることを発見 ～英国の学術誌 Anthrozoös に掲載～

報 道 各 位

関西学院広報室

日ごろは、関西学院に格別のご高配を賜り、ありがとうございます。

関西学院大学文学部総合心理科学科の中島定彦教授が「犬と飼い主は目が似ている」ことを発見し、その研究報告が英国の学術誌 Anthrozoös（アンスロズーズ）¹（2013 年 12 月号、10 月 25 日に電子版掲載）に掲載されます。論文名は「Nakajima, S. (2013). Dogs and owners resemble each other in the eye region. Anthrozoös, 26(4), 551-556」。

中島教授は動物心理学が専門で、2009 年に「犬と飼い主は顔が似ている」という研究結果を発表²。その後さらに犬と飼い主の研究を続け、新たに犬と飼い主が「顔」のなかでも「目」が似ていることを明らかにしました。

「犬と飼い主の顔が似ている」という研究は、中島教授の 2009 年の報告のほか、米国やベネズエラでも行われていますが、第三者が犬と飼い主の顔を「似ている」と判断する際、顔のどの部位が重要かを明らかにした点が今回の新たな発見となっています。さらにこれまでの研究では、「いかつい顔の人は獰猛そうな犬、優しい顔の人はかわいい愛玩犬」などのように全体的な雰囲気や先入観が類似性判断に影響した可能性がありましたが、今回の研究では「目」の写真だけで正しく判断できることから、上述のような可能性をほぼ排除できた点も新たな成果といえます。

中島教授は「目のどのような特徴が類似性判断に重要かが今後さらに明らかになれば、なぜ犬と飼い主が似ているのかという問いについても示唆を与えるだろう。例えば、経験ではなく遺伝によって規定される特徴（目の色など）が似ているのであれば、飼っているうちに似てくるのではなく、飼い主が自分に似た顔の犬を選んでいるといえる」などと話しています。

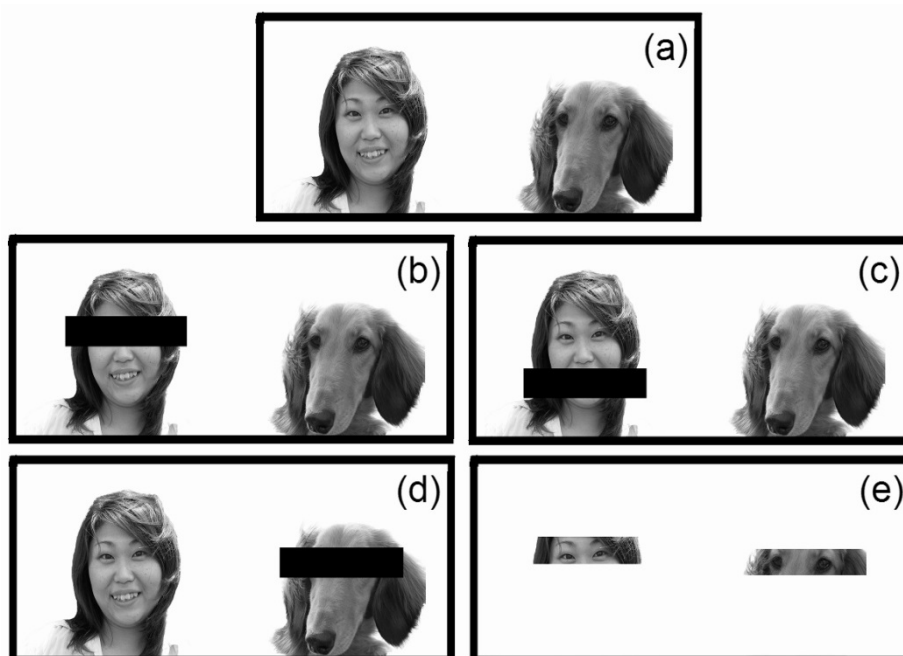
ぜひ本研究についてご取材いただきますようお願い申し上げます。実験方法詳細は次ページ参照下さい。

＜実験方法＞

40頭の犬とその飼い主のカラー写真³を使って、5つの実験を実施。すべての実験で用いた方法は基本的に同じで、次の通りです。

犬と飼い主40組を、正しく組み合わせられた犬と飼い主のペア20組（正セット）とペアを入れ替えた20組（誤セット）に分け、「犬と飼い主がより似ている」のはどちらのセットかを、事情を知らない合計547名の判定者に回答してもらいました⁴。第1～4実験は関西学院大学の大学生が判定者を務め、第5実験は犬に関する講演会出席者の方々（22～70歳）が判定者でした。

5つの写真条件を調べました。そのままの写真を用いた場合（a：隠しなし）、飼い主写真すべての目の周辺を黒バーで隠した場合（b：飼い主目隠し）、飼い主写真すべての口の周辺を黒バーで隠した場合（c：飼い主口隠し）、犬写真すべての目の周辺を黒バーで隠した場合（d：犬目隠し）、飼い主写真・犬写真すべてについて目の周辺だけ示した場合（e：目だけ）。各条件の写真の例は以下の通りです。



＜実験結果＞

実験の結果は以下の表（次ページに続く）の通りです。表中の数字は判定者数と正セットを選んだ人数、そしてパーセンテージです。なお、判定者の性別や犬の飼育経験、犬好きかどうかは結果に影響しませんでした。

写真条件	隠しなし	飼い主目隠し	飼い主口隠し	犬目隠し	目だけ
第1実験 (大学生)	49名/61名 (80%)	30名/60名 (50%)	37名/51名 (73%)		
第2実験 (大学生)	39名/56名 (70%)	28名/54名 (52%)		27名/57名 (47%)	

第3実験 (大学生)		40名/54名 (74%)
第4実験 (大学生)	36名/54名 (67%)	42名/55名 (76%)
第5実験 (講演会出席者)		31名/45名 (69%)

赤字で示したのは、いずれも偶然水準である 50%よりも統計的に見て有意に高い値です。

そのままの写真を用いた場合、67～80%の判定者が、正セットは誤セットよりも「犬と飼い主がより似ている」と答えました⁵。飼い主の目を黒線で隠したり、犬の眼を黒線で隠したりすると、正セットを選んだ人は 50%前後でした（たまたま偶然にそれを選んだということを意味しています）。いっぽう飼い主の口を隠しても結果にはほとんど影響しませんでした（73%が正セットを選びました）。また、犬の目と飼い主の目だけ見せても 69～76%の人が正セットを選びました。これらの結果から、「犬と飼い主が似ている」と判断するには目が重要であることがわかりました⁶。

注 1：人と動物の関係に関する学術的・科学的研究の促進を目的とする国際人間動物関係学会（International Society for Anthrozoology）が発行する専門誌。

注 2：2009 年発表の研究の概要は下記サイトをご覧ください。

<http://sadahikonakajima.cocolog-nifty.com/nakajima/2009/05/anthrozozos-9297.html>

注 3：2009 年に発表した論文で使用したものと同一写真（愛犬団体の集いに参加した飼い主と犬の顔写真）です。被写体の選択にバイアスが入らないように、写真撮影の依頼は撮影隊が出会った飼い主 50 名すべてに行い、全員から快諾を得ました（研究目的を知ると飼い主の表情に影響が出るかもしれないので、飼い主には研究目的を撮影後に告げました）。50 頭の写真のうち、雑種や両目が映っていないものを除くと、残ったのは 40 頭（すべて純血種）でした。なお、いずれの実験でも、写真の配置などが結果を歪めることがないよう配慮しています。

注 4：すべての写真は 1 枚の紙にカラー印刷して配布しました。半数の判定者は、正セットが左側、誤セットが右側に印刷されており、残り半数の判定者はその逆の位置に印刷されていました。

注 5：これは 2009 年に発表した論文の実験 2 の「類似度判定課題」と同じもので、そのときの結果（66%が正セットを選択）とほぼ同様の結果になりました。なお、同一条件でも実験によって選択率がやや異なっているのは、判定者の課題への動機づけなどの違いによるものだと思います。

注 6：ここでは単純に「目」と書きましたが、実際には「目およびその周辺」です。写真の例をご覧ください。

以上